2003.8.20

エネルギー･文化研究所 濱 惠介

ホームプロ・メールマガジンコラム連載

「エコで楽しむ住宅改修」 第３回

古い家に宿る価値 （新築にこだわらず、今ある住宅の改善が面白い）

新品と中古。この言葉から受ける印象は、今も決定的かもしれません。ひとつは新機能搭載でピカピカ、もう一方は旧式でちょっと手垢のついたイメージ、でしょうか。たしかに車や家電製品はそうかもしれませんが、住宅は少し違います。

住まいの価値は、必ずしも時間の経過とともに減って行くわけではありません。劣化する部分がある一方、変わらない価値や逆に増進する価値もあるのです。たとえば部屋の広さや基本的な寸法は変わらない価値です。庭の植栽は成長と良い手入れで深みを増します。古民家の黒光りのする柱や風合いの出た煉瓦、苔むした石などは明らかに時間が作り出した味です。

最近は「古材利用」や「民家再生」がひとつのブームになっています。しかし、時間を経たものの価値は、古民家や文化財など特殊なものだけにある訳でなく、身近な住宅と生活材にも言えることです。その意味はモノが古びて味がでることともに、慣れ親しんだ空間配置、使い勝手の分かった建具や収納、さらには、落ち着き・安心感など精神的な意味も含めて、長い間の繰り返しや試行錯誤の結果生まれた価値があります。家中すべてがまっさら、というのは不自然で気持ちが悪いし、長年付き合った家具が落ち着かなく見えるでしょう。

既築住宅が持つもうひとつの意味は、実際の空間や見え方を確かめることができることで、設計図や模型で想像するのに比べて絶対的な強みです。目の前にある状態を出発点として改善策を考えるのですから、出来上がりを確実に予測することができます。

他の建物や自宅の改修工事で要らなくなった部材を再利用したり、本来の用途と違った目的に転用したりするのは面白いものです。まるで知的なゲームを楽しむように制約条件をクリアする楽しさがあります。木製建具は加工が容易なので、自分でも施工できます。

私が自宅の改修で実践した例にはこんなものがあります。1）大型の透明ガラス入りアルミサッシ（障子）をダイニング・キッチンの窓の庇にした。勝手口まわりに雨に濡れない場所ができ、窓からの採光も確保した。2）不要となったガラス４枚を框戸（かまちど）と屋内の窓に利用した。3）他の住宅で不要となった紙障子２枚を加工して、吹き抜けを水平に区切るスクリーンにした。下からロープを操作し開閉する。ガラス屋根から差し込む天空光を利用しながら、冬は暖気が逃がさず、夏は直射日光をさえぎって室内の冷気を保つ。

古材や発生材の再利用は、資源の消費と廃棄物を減らすことの他、木材は長く使われた実績から、それ以上変形する心配のない保証つき、という意味もあります。また、「シックハウス症候群」と呼ばれる揮発性有機化合物による健康障害も、古い住宅ならばリスクが減ります。（但し、中古住宅の購入に際し、前の居住者が防虫剤などを多用していた場合は、事前に話を聞いて情報を入手する必要があります。）

このように考えると、理想の住まいづくりには新築だけでなく、今ある住宅を改善して使いつづけることにも大きな可能性があるのです。経済的に有利なばかりか、かえって面白い場合があります。さまざまな制約条件と格闘しながら知恵を絞り、他にはない独自性を発揮することで、これまでの暮らし・使い勝手と連続した新たな生活空間が生まれることでしょう。

近代建築の巨匠ル・コルビジェは「家は住むための機械である」と言ったそうです。私はその表現は一面的すぎると思います。機械と異なり、住まいは機能性だけでは評価できません。人の心と響きあう何かが必要です。そこには年月を経ることで高まる価値も含まれるのです。